

# SAFE

2008

3

くらしと地球と金融をつなぐ環境情報誌

## 日本発、世界の経済をエコ化する!



### eco japan cup 2007 **特集号**

●SAFE特別対談

日本がグリーン・ティッピング・ポイントを  
乗り越えるきっかけを生み出す、  
それが、eco japan cupの使命です。

山本良一氏 × 崎田裕子氏

eco japan cup 2007実行委員長  
東京大学 教授

eco japan cup 2007実行副委員長  
環境ビジネスウィメン代表

- eco japan cup 2007 受賞一覧
- 環境ビジネスウィメンプレゼンツ  
TALK EVENT [トークイベント]
- eco japan cupについて
- SAFE NEWS Archives

vol.70



SMFG

三井住友フィナンシャルグループ  
SUMITOMO MITSUI FINANCIAL GROUP

# SAFE vol.70 2008.3

## eco japan cup 2007 特集号

### CONTENTS

■SAFE特別対談	2
日本がグリーン・ティッピング・ポイントを 乗り越えるきっかけを生み出す、 それが、eco japan cupの使命です。	
山本 良一氏 × 崎田 裕子氏 <small>eco japan cup 2007実行委員長 東京大学 教授</small> × <small>eco japan cup 2007実行副委員長 環境ビジネスウィメン代表</small>	
■eco japan cup 2007 受賞一覧	6
ビジネス部門	7
カルチャー部門	10
ライフスタイル部門	14
■環境ビジネスウィメンプレゼンツ TALK EVENT【トークイベント】	16
■eco japan cupについて	18
■SAFE NEWS Archives	20
福田首相、2020年までに30%のエネルギー効率改 善目標を提案／日本の年平均気温は100年当たり 1.10度の割合で上昇	

# SAFE EYE

## なぜ、東京ではできないのか

先日、東京で開催された、日英共同研究プロジェクト「低炭素社会の実現に向けた脱温暖化2050プロジェクト」第3回国際ワークショップで、ロンドン市長室特別顧問のチャールズ・セクレット氏の話聞くことができた。

英国のロンドンは、2007年2月、二酸化炭素排出量を2025年までに1990年比で60%削減するための行動計画を発表している。このための予算は今後3年間で7,800万ポンド(約180億円)だと報道されていた。今回、その詳細を聞くことができた。行動計画では、家庭の省エネのため保温効果を上げる家屋の外壁や屋根の改修に市当局が資金を援助。企業や公共部門での夜間の照明やコンピューターなどの電源を切ることを奨励。ドライバーに停車中のアイドリングをやめ、エンジンを停止するよう勧告など、その内容はきめ細かい。それでも試算によれば、家庭やオフィスで照明や電源を切ることで230万カーボントンの二酸化炭素を削減、省エネ型の電球の導入で57万5,000カーボントンの二酸化炭素削減と1億3,900万ポンドの光熱費節約が実現される。人々が好みのクラスで最も燃費のよい自動車に乗り換えると、各々のクラスだけで30%の二酸化炭素排出が抑制されるのだという。

ここで注目したいのは、この行動計画が「夢の技術革新」を前提としているのではなく、生活者の暮らし方を変えれば削減が実現できるとしている点だ。行政にとって、人々の行動様式に口を差し挟むというのは勇気があることだろう。それでも、強力なリーダーシップで行動計画を牽引するのがケン・リビングストン市長だ。市長には環境政策に関する堅固な信念がある。かつて、SUV車の「混雑エリア」への乗り入れ料金を3倍に引き上げたとき、彼が「わざわざ『環境汚染の元凶』の乗り物を購入する以上、その代償を支払うのは当然だ」と断言した逸話はよく知られている。

片や日本では、こうした総量削減目標を前提とした政策に風当たりは強い。東京都が環境確保条例に盛り込もうとしている温暖化ガス総量削減義務には激しい抵抗が起こっている。2008年1月1日、全国で初めて「1990年比で2020年までに二酸化炭素を25%削減する」と総量削減を明記した「千代田区地球温暖化対策条例」を施行した千代田区でも「具体的な行動計画はこれから」とトーンダウンしている。

ロンドンでできて、なぜ東京ではできないのか。そのことを冷静に議論していくことが今、求められている。

(株式会社日本総合研究所 足達 英一郎)



eco japan cup 2007

日本発、世界の経済をエコ化する!

特集号

eco japan cup 2007

環境と経済の好循環社会を目指し、官民協働事業として、環境省、環境ビジネスウィメン、三井住友銀行の三者主催で開催された「eco japan cup」は、今回で2回目を迎えた。前回に比べて枠組みも拡大し内容も充実、コンテストへの応募件数は前回を上回り、コンテスト自体が一大プロジェクトに成長していることがうかがえる。

今回の特集では、2007年12月13～15日に東京ビッグサイトの「エコプロダクツ2007」会場内にて展示・発表された「eco japan cup 2007」の概要や受賞プランなどをご紹介しますとともに、実行委員長の山本良一氏と環境ビジネスウィメン代表の崎田裕子氏による特別対談もお届けする。

(編集協力:環境ビジネスウィメン事務局)

eco japan cup 2007 開催にあたって



三井住友銀行  
頭取 奥正之

環境問題の深刻さは21世紀に人類が共同して取り組むべき、重要かつ喫緊の課題として認識しなければいけません。環境問題に対する取り組みを、単なる社会貢献にとどまらず、金融機関が本業を通じた、つまりビジネスとして成立させていくことに大きな意義があり、環境問題の解決に新しい道が拓けると考えております。

この「eco japan cup」はまさに「環境と経済の好循環社会・日本」の実現を目指した産・学・官連携による協働事業であり、その社会的な意義は極めて高いものがあります。今回はイベント全体では400件近い応募をいただき、大変優秀なプランやアイデアが見受けられました。受賞された方も、残念ながら受賞されなかった方も、更にプランを磨き上げ、大きなビジネスに育てあげられることを期待しております。

三井住友銀行としても引き続き、環境ビジネスを発掘・育成する取り組みを継続してまいります。キーワードは「サステナビリティ」です。この「eco japan cup」も将来的には環境ベンチャーの登竜門となることを期待しております。



**山本 良一氏** eco japan cup 2007実行委員長  
東京大学 教授

**崎田 裕子氏** eco japan cup 2007実行副委員長  
環境ビジネスウイメン代表

## 日本がグリーン・ティッピング・ポイントを 乗り越えるきっかけを生み出す、 それが、eco japan cupの使命です。

「eco japan cup 2007」は、環境と経済の好循環を目指し、エコビジネスの芽の発掘と育成を目的としたプロジェクトである。エコイノベーションを通じて新たな経済社会を創出し、持続可能な社会を構築するためeco japan cupはどのような役割を果たすべきなのか。eco japan cup実行委員としてプロジェクトを支えるお二人、東京大学教授の山本良一氏と環境ビジネスウイメン代表の崎田裕子氏による対談をお届けする。

目の前にある危機、  
環境問題解決のための  
新たな視点

**崎田:**現在は、環境問題がますます重要視されています。いかにして環境技術やライフスタイルの変革を社会に定着

させるかが問われていますが、「eco japan cup 2007」では、環境問題解決の核となる技術やアイデアを経済社会やライフスタイルにどのように広げていくかを目指しています。そのため、第2回となる今回は、応募部門をビジネス、カルチャー、ライフスタイルの3部門としまし

た。企業と市民をつなぐカルチャー部門を新設したことが、大きな特長です。前回に比べて格段に応募者が増え、多くの方に関心を持っていただけたことは大きな成果といえます。

**山本:**応募者の増加は、環境問題への



関心が高まっている表れだといえますね。

**崎田:** 審査をする側として新たな発見もありました。新エネルギー源の創出という点では、環境ビジネス・ベンチャーオープン大賞を受賞したゼネシスの「海洋温度差発電ビジネス」は興味深いプランでしたし、新たなエコの視点での取り組みという点では、真宗大谷派・東本願寺の「東本願寺御修復環境プロジェクト」や小学生が「緑のカーテン」への取り組みを通して体感し、学んだ価値を歌として表現した『MIDORI～繋がる輪～』は印象的でした。寺社や学校が環境活動に取り組むことによる波及効果は大きいので、これを機に、さまざまな領域に環境共生型社会の創造を目指した活動が増えることを期待します。

**山本:** 新エネルギーへの着目、エコ意識の波及効果を狙うことも大切ですが、あえて苦言を呈すならば、地球温暖化問題への危機感がまだまだ甘いと私は感じました。

地球温暖化は加速しており、このまま抜本的対策を取らずに温暖化が進行すると、夏季の北極海氷の消失やアマゾン熱帯雨林の枯死と砂漠化などの危険な気候変化が次々と生ずると考えられています。特に、北極海氷は危機的状況に直面しており、2007年9月には北極海氷面積が衛星観測史上の最小値記録を更新、約413万平方キロメートル

まで減少してしまったのです。2013年の夏季には完全消滅するとも予測されています。

このような状況をかんがみると、eco japan cupに応募するアーティストたちには、地球環境の現実を、社会への警鐘や提言という形でもっと強いメッセージで発信してほしいです。たとえば、エコミュージックの受賞者は、「北極海氷」と書いたTシャツを着て演奏するくらいでもよいですよ。

## eco japan cupの

### 本当の使命

**山本:** 社会的な臨界点を表す「ティッピング・ポイント」という言葉があります。最近では地球温暖化が議論される際に、この言葉を活用した「グリーン・ティッピング・ポイント」という表現が使われます。なぜこの言葉を例に挙げたかという、現在の日本は、今まさにその臨界点に達する状況なのです。

社会、経済、行政などがさまざまな環境活動に取り組んでいるものの、まだグリーン・ティッピング・ポイントを乗り越えるレベルに至っていません。グリーン・ティッピング・ポイントを乗り越えるには、強力なエコイノベーションを起こす必要があるのです。

eco japan cupは、その役割を担っている活動だと考えています。雨後のたけのこのように環境関連のコンテストや

賞が増え、それらの大半が賞を与えるだけのコンテストで終わっていますが、eco japan cupは、環境省、環境ビジネスウイメン、三井住友銀行主催という産官民一体の有益で発展的なコンテストであり、日本がグリーン・ティッピング・ポイントを乗り越えるきっかけを生み出す存在となりうるのです。

**崎田:** 予想以上の温暖化問題進行を嘆くだけで、日本国民は現実を客観視しているところがあります。これを打破するためにも、eco japan cupが、多くの人に環境問題の具体的な解決策を提示できるように私たちが働きかけていく必要がありますね。

**山本:** まさにそれが重要なのです。具体例をきちんと丁寧に社会に埋め込むことが、同じ志を持つ多くの人を目覚めさせ、次の行動を導くのです。しかし、環境問題は誰かが何かを起こすことを待っていたのでは手遅れになってしまいます。環境問題は、国家総動員体制で臨むくらいの抜本的な対策と、確固たる意志を持った熱意ある強いリーダーが欠かせません。

**崎田:** そうですね。環境対策は人の心によるところが大きいので、熱意あるリーダーは本当に大切ですね。

私はNPO法人の理事もしているので、各地のNPOの活動情報が聞こえて



PROFILE

山本 良一(やまもと りょういち)

1974年、東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。先端科学技術研究センター教授、国際・産学研究センターを経て、2004年から生産技術研究所教授、文部科学省科学官。

くのですが、最近、地域における環境活動に変化が見られると感じています。当初は環境や地域のお手伝いというボランティア精神で参加していた方々が、最近では、エコビジネス型の思考に方向転換しつつあるということです。彼らは、コミュニティ・ビジネスが地域活性化につながり、市民の意識だけではなく、社会全体の仕組みを変えようということに気づきはじめています。彼らが築き上げた地方発のエコビジネスや地域活性化プランを、他の地域でも活用できるような情報を開示していけば、日本を地域から元気にするというメッセージを発信で

きると思うのです。

こういったメッセージが多くの人に伝わることで、社会構造の変化がはじまるのだと私は考えています。そういった意味でも、eco japan cupは地域も巻き込んだ大きな仕掛けですし、グリーン・ティッピング・ポイントを乗り越える可能性があると思っています。

環境ビジネスモデル  
育成のために

山本:eco japan cupは、非常に将来性のあるベンチャービジネスの発掘や創出をし、融資や教育支援をするという明確なビジョンを持っています。昨年、ストックホルムでeco japan cupと同様のスキームを持つ環境ビジネスのコンテストが開催されました。そこには、世界中から環境ベンチャーなど社会起業を目指す起業家が集い、そのビジネスモデルに投資したい機関投資家がやってきます。受賞者たちにとってそこは、自らのエコビジネスプランを世界の投資家にアピールする場であり、勝ち残ればすぐに融資や教育訓練を受けるシステムが整えられています。

崎田:eco japan cupもエコビジネスに対して、日本ひいては世界の投資家たちを呼び込み、融資から育成まで一貫したビジネスモデルを構築できるようになるのが理想ですね。業種を超えてさまざま

な企業や団体が参加するようになれば、日本の市場もきっと変わると思います。

山本:eco japan cupを単なるエココンテストで終わらせてはいけません。受賞プランをしっかりサポートし、社会に浸透させ、動かしていくかを考え実行することが重要です。そのためには、二大転換が必要です。1つは政策、もう1つは我々のマインドセット。すなわち心の持ち方とイノベーションの大転換です。日本はすべてにおいて空前絶後の大転換を図らなくてはなりません。環境立国を国是とすべきです。

崎田:国という意味では、各省庁が地球温暖化対策のビジョンを掲げていますね。その1つ1つは名案だと思いますし、実現することを期待します。しかし政府のビジョンが国民に伝わっているとは到底思えません。国家としての具体策を、政府の強いリーダーシップではっきり示してほしいですね。

華々しくポジティブな  
持続可能なビジョン。  
エコパラダイスを目指して

山本:京都議定書第一約束期間の開始年である2008年は、環境問題に対して重い腰を上げざるをえない1年になります。政府が具体的なビジョンを示さないのであれば、eco japan cupが持続可



能な社会を創出する具体策を示さなくてはなりません。

**崎田:**私たちは、eco japan cupを仕掛けた側として、受賞者や後援者の情報発信の機会を増やすことが次なる使命だと考えています。それこそが、社会の変化を導くための私たちの使命なのです。また、受賞プランを発表する場となった「エコプロダクツ展」もともに発展させていくことが重要です。次回のeco japan cup 2008は、新たな技術がもたらす持続可能な社会や思い描くビジョンを「見える化」できるような展示方法を提案したいですね。

**山本:**私は、エコプロダクツ展の実行委員長として9年間運営に携わってきました。その経験から述べれば、環境に関するビジネスも経済も瞬時に大発展することはありません。まさに、継続は力なりです。

**崎田:**eco japan cupを開催したことだけに満足せず、このコンテストを通して出会った多くのプラン、すなわち、ビジネスモデル、技術、ライフスタイルを、カルチャーをつなぎ手として社会に定着させることも私たちの重要な役割です。「エコだから」と押し付けがましい形ではなく、自然に環境意識啓発ができるような取り組みにしていきたいですね。

**山本:**もうひと言加えるならば、私はeco japan cupはもっと華々しく開催すべきだと思っています。エコというと節約や我慢のようなイメージが先立ってしまう風潮がありますが、エコは生活レベルを下げるのではなく、むしろ生活を向上させることを主張したい。言うなれば、気候安全保障を進めながら「エコ賢沢」「エコ快適」を社会に浸透させたいですね。

**崎田:**その意見に賛成です。環境ビジネスの未来を担う若者や非営利団体などで生き生きと環境活動をする女性たちが大勢いますが、彼らは節制ではなく、アイデアを活かして環境活動や社会貢献をしています。彼らの中から近い将来、エコ長者が誕生することも夢ではありません。未来に希望を持ってよいと思います。

**山本:**私は、北極海氷の融解や生物種の絶滅、さまざまな自然災害など、温暖化による地球の危機的状況を地獄になぞらえ「地球温暖化地獄」と表現し、暴走する温暖化を警告しています。温暖化地獄の地図は見えていますが、その対極にある天国の地図となる「エコパラダイス」はまだ見えていません。つまり、崎田さんのおっしゃるような未来が「見える化」されていないのです。見えていないからこそ、皆がエコパラダイスに確信が持てないのです。

ですから、実際にあるエコ賢沢の具体例を世間にアピールするべきですね。



## PROFILE

**崎田 裕子(さきた ゆうこ)**

ジャーナリスト・環境カウンセラー。1974年、立教大学卒業。集英社で11年間雑誌編集を務めた後、フリージャーナリストとして独立。生活者の視点で社会を見つめ、近年は環境問題、特に「循環型社会づくり」を中心テーマに、講演・執筆活動に取り組んでいる。環境省登録の環境カウンセラーとして環境学習の推進にも広く関わるほかに、環境分野の委員を多数務めている。

情報発信をしなければ、持続可能な社会の構築を空想しているだけと同じことですから。

**崎田:**eco japan cupを通して、エコパラダイスが見えるよう、ビジョンを具体化することを目指したいと思います。

**山本:**こうしている間にも、地球温暖化の進行は加速度を増しています。目の前の現実を直視し、確固たる意志で地球温暖化問題に立ち向かっていきましょう。



# eco japan cup 2007

受賞一覧

eco japan cup 2007は、経済が関わる3つのカテゴリー、企業(ビジネス)、市民(ライフスタイル)、それをつなぐ文化(カルチャー)と分類し、各分野における「eco」をテーマにコンテストを実施。有識者や各専門分野のスペシャリストなどの審査により受賞モデル・プランを選出するものである。ここでは、今回の受賞者と受賞モデルやプランを紹介する。

## 部門

### ビジネス部門

環境ビジネスアワード <選定対象:大企業>

大企業が現在事業化している環境ビジネスモデルで、社会的認知があり、一定の功績を認める事業を、中・小企業やベンチャー企業にとって成功の目標となるべく選定。

環境ビジネス・ベンチャーオープン <応募対象:中小企業>

NPOや中小企業、ベンチャー企業の環境ビジネスモデルで、まだ社会的認知の低い事業、またはまだ事業化していない企画に対して表彰。表彰されたビジネスモデルについては支援を行い、事業発展を応援。

### カルチャー部門

エコデザイン・エココミュニケーション <応募対象:エコデザインはデザイナー、エココミュニケーションはCMクリエイター>

環境マインドの高い、優れたデザインやコミュニケーションを表彰することで、環境ビジネスを社会に浸透させる消費者(市民)と企業との橋渡しを担う役割を目指す。

エコアート・エコミュージック <応募対象:アーティスト>

グラフィックや造形、ミュージックなどを通して、市民の生活の中に「eco」という感性を浸透させ、現代社会においての環境と芸術を表現することで、日本の新たな文化の創造を期待。優秀な作品のアーティストは、その後の活動を応援。

### ライフスタイル部門

エコチャレンジ! <応募対象:一般市民(個人)>

市民個人が生活の中で実行している環境に配慮したライフスタイルを募集し、優れた取り組みやアイデアを表彰。環境配慮型のライフスタイルを促進。消費者のニーズを企業に紹介するための情報提供・マーケティングの場になることも目指す。

市民が創る環境のまち 元気大賞 <応募対象:環境活動を行うNPO団体、事業者など>

NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネットが主催する「第7回市民が創る環境のまち 元気大賞2007」をeco japan cup 2007の1つのコンテストとして連携。環境活動で地域を活性化するロールモデルを表彰。

## 開催期間

参加登録:2007年7月2日~9月15日

応募提出期間:2007年8月27日~9月30日

結果発表:2007年11月中旬

表彰式および展示:2007年12月13~15日 エコプロダクツ2007会場にて

ビジネス部門は、2007年9月23日、カルチャー部門「エコミュージック」は、2007年10月15日が締切





eco japan cup 2007

## 環境ビジネスアワード

ロールモデルというべき成功した環境ビジネスを選定し表彰

### ハード部門

#### 東レ株式会社 受賞モデル『炭素繊維複合材料(CFRP)事業』

重さは鉄の約1/4、強度は鉄の約10倍である炭素繊維は、軽量化を通じた燃料改善とCO<sub>2</sub>削減効果が期待され、現在、航空宇宙分野、産業分野など、さまざまな形でその活用が注目されている。炭素繊維複合材料(CFRP)の研究・開発・製品化に

長年取り組み、現在、世界最大メーカーである東レは、世界で初めて炭素繊維を使った自動車部品事業への本格参入を開始。今後さらなる需要拡大が期待される。



自動車の構造部材も「軽くて安全」なCFRPの大きな用途となっている

#### シャープ株式会社 受賞モデル『太陽光発電事業』

シャープが太陽電池の研究を開始したのは、1959年。1963年には量産技術を確立。太陽光発電の普及拡大に伴い、2000年から太陽電池の生産シェアで7年連続して世界トップ。太陽光発電トップメーカーとして、太陽光発電のさらなる開発と普及に注力し、商品の省エネ設計による効果と合

わせて温室効果ガスの削減を推進。また、結晶型太陽電池に加えて薄膜型太陽電池や集光型太陽光発電システムなど、多様な太陽電池の開発を展開中。

2000年～2006年実績。  
米国『PV News』(2007年3月号)による。



シャープ亀山工場に設置している大規模太陽光発電システム

### ソフト部門 該当なし

### 実行委員会特別賞

#### 株式会社キッズシティージャパン 受賞モデル『キッズニア東京』

2006年10月5日に、「日本発の子どもが主役のこどもの街『キッズニア東京』」をオープン。子供たちが楽しみながら、さまざまな仕事体験や参加型のアクティビティによる社会体験、専用通貨による経済活動などを体験できる“学び”と“エンターテインメ

ント”を両立した場を提供している。加えて、2007年3月29日に「環境の国宣言」を行いエコ・プロジェクトを推進。子供たちに「地球温暖化」の問題に対する“気づき”を与え、具体的な“行動”へつなげることが期待されている。



### 環境ビジネスアワード[審査員コメント] 敬称略

#### 小池 百合子

元環境大臣/衆議院議員  
環境ビジネスウィメン顧問

#### 山本 良一

東京大学 教授  
eco japan cup 2007実行委員長

#### 木俣 信行

鳥取環境大学 教授

#### [選定コメント(木俣信行)]

環境問題への対応には、科学的知見に基づいた先見性と、これに伴う先端的な取り組みは避けられないさまざまな困難を克服する創造力および忍耐力が不可欠と考えられる。また、その取り組みを発展させて地球環境問題に貢献していくにも、継続的努力は不可欠である。さらに、こうした取り組みには当然大きなリスクが伴う。このアワードでは、こうした諸点に対して企業が如何なる考え方で意思決定し、人的、財政的投資をしてきたかを含めて、総合的に取り組みの意義と成果の広がり、そしてそれらの継続性を重視した。東レ株式会社の『炭素繊維複合材料(CFRP)事業』は、移動エネルギーの削減に大きく貢献する、軽量かつ高強度の材料開発に

早くから取り組み、技術的優位性を維持発展させてきた。シャープ株式会社の『太陽光発電事業』は、人類文明のサステナビリティに希望を持たせる商品であり、早くからその意義を認識して技術開発に取り組み、世界のトップシェアを獲得するに至った事業活動は、極めて優れたものである。株式会社キッズシティージャパンのプロジェクトは、子供たちの好奇心を刺激しながら、同時に臨場感溢れる体験を通じて対象の理解を深めるという教育システムを通じて、環境問題への深い関心と理解力を涵養することが期待される。



eco japan cup 2007

## 環境ビジネス・ベンチャーオープン

応募総数 140 件

中小企業、ベンチャー企業対象の環境ビジネスプランコンテスト

大賞 賞金300万円

### 株式会社ゼネシス

受賞プラン『海洋温度差発電(OTEC)技術を核とした温度差発電ビジネス』

受賞者コメント 株式会社ゼネシス代表取締役社長 里見 公直氏

酒造機器メーカーなどを経営していた私が温度差発電ビジネスに転進したきっかけは、阪神・淡路大震災でした。がれきの山、停電で恐ろしいほどに真っ暗になった神戸の街。そこに手を差し伸べてくれた多くの方々への報いるため、祖父の時代からお世話になった神戸にも「世の中のためになる仕事が見たい」と思いました。

そして出会ったのが、海洋温度差発電(OTEC; Ocean Thermal Energy Conversion)の技術と、それを研究されていた上原春男先生(当時、佐賀大学理工学部教授、前佐賀大学学長)でした。OTECは、海の表層水と深層水の温度差が15度あれば発

電することができます。さらに、温度差を利用した海水淡水化技術を組み合わせれば、5度の温度差で、発電に使った海水を淡水化することもできます。OTECは21世紀に必要とされる技術だと直感しました。

当初は、うさんくさい目で見られることも多く、技術を認知してもらうまでに時間がかかりました。しかし、OTEC事業の成功を信じて

いましたので、技術的要素開発、人材の育成、市場開発に地道に取り組み、ようやく成果が結実し始めました。間もなく、クウェート最大のミナ・アル・ハマディ製油所で、排熱を利用した発電造水プラントの受注を予定しています。

日本は制度面で難しさがありますが、今回の受賞を追い風に市場が拡大することを期待しています。そして、何よりも現状に甘んじることなく、技術力の向上、ビジネス



海洋温度差発電・海水淡水化装置ハイブリッドプラントの模型

の拡大を追求し続けます。

かつて、空を飛ぶ夢を実現したライト兄弟。我々はライト兄弟には到達したかなと思っていますが、ここからが正念場です。OTECで得たエネルギーや、利用したミネラル豊富な深層水は、その国の漁業や観光産業にも役立つはずですし、それが子供たちの笑顔を生むでしょう。今後は、そんなビジネスを提案していくつもりです。



代表取締役社長 里見 公直氏

敢闘賞 賞金100万円

### 株式会社コスト削減総合研究所

受賞プラン『“見える化”による「人」創り、エコな「現場」創り』

“コスト削減を通じて日本の中堅・中小企業を元気にする!”をミッションに、エネルギー関連・オフィス関連、オペレーション関連など企業が抱えるあらゆるコストをトータルでマネジメントする、国内唯一のコスト削減の総合コンサルティング会社。運用改善プログラムや省エネ機器の導入などの設備改善などを

通してCO<sub>2</sub>削減を実現し、企業の環境経営に貢献するなど、省エネルギーコンサルティング事業を展開中。顧客企業のエネルギーコストを削減するだけでなく、CO<sub>2</sub>削減の“見える化”により、社員の環境意識を涵養する。



三井住友銀行賞 賞金50万円

## 株式会社アネックス 受賞プラン『5×緑(ゴバイミドリ)東京里山計画』

🎯 受賞者コメント 株式会社アネックス 5×緑事業部 宮田 生美氏

都会に暮らす私たちの足元を見ると、コンクリートやアスファルトで固められ、植物が育つための豊かな土がなかなかありません。土も緑もない環境を嘆くのではなく、このような都会に植物を取り戻し、都市緑化や里山の環境保全につながるシステムを構築したいと考えたのがこのプロジェクトのはじまりでした。また、私自身の心にかなうプロジェクトとして、微力ながらも社会貢献をしたいという思いもありました。

このたび「三井住友銀行賞」を受賞した「5×緑」は、同じ面積でも緑の量が5倍になるという都市緑化のためのシステムです。これは、金網でつくったフトンカゴに保水性の

高い軽量人工土壌を詰めて植生基盤をつくり、緑量を増やすために側面にもツル性植物を、上面には里山にある在来の草や木を中心に植栽した緑化ユニットです。都市のライフスタイルに合わせて、公共空間やビル、個人のお宅までユニットの取り入れ方は自由自在です。

一方、都市だけではなく、今は地方も田畑の放棄や農薬、山林の管理の人手不足などで、かつての豊かな環境を保つことが難しくなっています。「都市に緑が増え、人々がそれを楽しむことが里山の植生の保全につながる」、そんな仕組みをつくらうというのが「東京里山計画」のコンセプトです。

このような活動を多くの方に知っていただき、都市でも里山でも「そこに昔からあった懐かしい緑」が増えるよう頑張っていきたいと思います。



丸の内における5×緑「里山ユニット」の設置例

環境ビジネスウィメン賞 賞金5万円

## LBA(ロハス・ビジネス・アライアンス)

受賞プラン『LOHASビジネスのコミュニティ LBA(ロハス・ビジネス・アライアンス)』

LOHASの価値観に基づくビジネスを促進し、LOHAS事業の創造・発展を通じ、持続可能な社会への貢献を目的とした会員組織として2007年7月に設立。セミナーや交流会、プロジェクトを通して、知識・スキルを共有するとともに、ビジネスアイデア

を具体化するプラットフォームとして活動。また、啓発活動を通じてLOHASビジネスの輪を広げるとともに、LOHASの価値観を持った生活者の増加と企業のLOHAS化を促進する。



eco japan cup 2007展示風景

環境ビジネス・ベンチャー オープン[審査員コメント] 敬称略

団体審査員  
三井住友銀行  
法人マーケティング部  
  
株式会社日本総合研究所  
  
環境ビジネスウィメン  
  
環境ビジネスエージェンシー  
エキスパート登録者

奥 真美  
首都大学東京都市教養学部 教授  
eco japan cup 2007実行委員

審査に参加して、環境関連分野におけるニッチ・ビジネスの可能性を大いに感じた。その中で、『5×緑 東京里山計画』は、確たる理念と将来展望に基づくプランとして印象に残った。今後、「eco japan cup」の周知をより広く図り、全国各地から選りすぐりの取り組みについての応募が、多数寄せられることを期待している。

北野 大  
明治大学理工学部 教授

多くの企業が環境問題を配慮した技術開発、システムづくりに取り組んでおり、今後のさらなる発展が楽しみである。なかでも、本来大企業が取り組むべき基礎的な研究である低品位エネルギーの有効利用方法の開発が最も印象に残った。表彰を受けた企業が、今後さらに技術力、ソフト力を高め、世界的に評価される企業に成長することを期待したい。

國領 二郎  
慶応義塾大学総合政策学部 教授

「都市緑化」と「里山や種子の保全」の両立を目指す『5×緑』は、事業化できれば非常におもしろいプラン。ぜひ、大学の知を活用していただきたい。今回の「eco japan cup 2007」で大学との共同研究をプロデュースするなど、新しい産官学の連携スキームが構築できた。今後、ビジネスアイデアの成長を一層加速させることができると思う。



eco japan cup 2007

## エコデザイン

応募総数 53 件(エコデザイン/エココミュニケーション)

持続可能な社会を促進するための工業製品デザインやグラフィック・デザインコンテスト

## グランプリ

賞金100万円

該当作品なし

## 準グランプリ 賞金50万円

## 木塚 あゆみ 受賞作品『Global ホタル通信』

「今そこにあるものと地球の繋がりを感じることによって、ecoに繋げる」をコンセプトに制作された『Globalホタル通信』は、地球を模したゴミ箱上部が、ゴミ箱内の重量の増加率によって色を変化させながら発光する。ゴミの存在を意識させ、資源やエネルギーを無駄遣いしない意思に結びつける。



授賞式の模様

## 石渡 誠 受賞作品『core』

スケートボードとしての役割を終えたデッキ(板)を独自の積層木材に再生し、アクセサリ、インテリア、オブジェなどに生まれ変わらせた作品。スケートボードをリサイクル資源として幅広く活用することによって、「Keep the earth」の考え方を広めていく。



necklaces &amp; charms



stools

## 特別賞 賞金30万円

## 菅家 隆広 受賞作品『Chlorophyllous.』

光合成を行う緑藻類のクロレラを携帯することにより、日常生活で排せつされるCO<sub>2</sub>を酸素に還元。また、光合成を行った後のクロレラを肥料や電気エネルギーとして再利用する装置。無意識に生活の一部にならぬものとして、人々が日常生活の中で具体的かつ楽しくエコロジー活動に取り組める。



## エコデザイン・エココミュニケーション[審査員コメント] 敬称略

## 石田 秀輝

東北大学大学院環境科学研究科 教授

楽しく、アートとしても美しいものをたくさん見せていただいたが、環境をどのように捉えているのかというしっかりした意識を作品に展開しているものが少し不足しているように感じた。今後、急激に劣化する地球環境という問題を正面から受け止め、楽しくワクワクするたくさんの夢や仕掛けを期待している。

## 菊池 武夫

クリエイティブディレクター

エコに対して発想のおもしろい作品があり、応募作品数が増えれば、よりエコに対する意識が高くなると感じた。『Chlorophyllous.』は、現実的に実現可能ではないのかもしれないが、人間の可能性を強く感じる作品だった。今後の環境問題について、一日でも早く、強い意志を持って温暖化対策を、国、国民が実施することを願う。

## 永井 一史

株式会社HAKUHODO DESIGN代表取締役社長  
アートディレクター

賞の認知や応募作全体の質も含めて、まだまだ過渡期。しかし、エコに特化した審査自体はおもしろく、審査員の方々とディスカッションを含めてとても有意義な時間だった。個人的には『Chlorophyllous.』が好き。発想が斬新で、エコを価値観やスタイルを通じて伝えるという新しい可能性を感じたアイデアだった。



eco japan cup 2007

# エココミュニケーション

応募総数 53 件(エコデザイン/エココミュニケーション)

持続可能な社会を促進するためのCMなどの商業デザインコンテスト

グランプリ

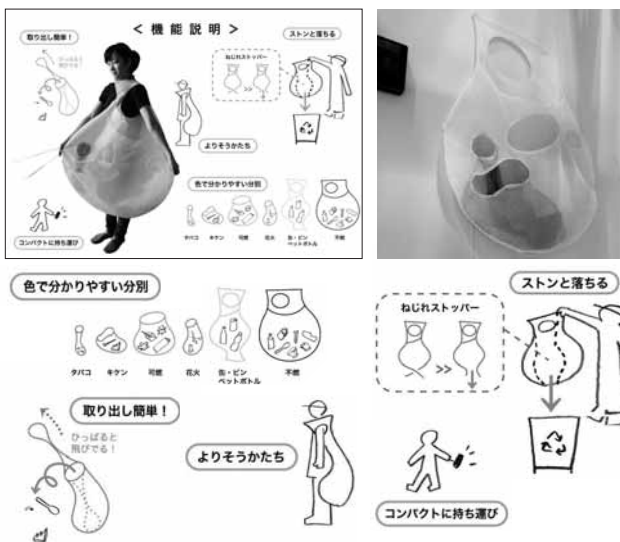
賞金100万円

該当作品なし

準グランプリ 賞金50万円

## 織咲 誠

受賞作品『BAG in bag/バッグ・イン・バック』



「ゴミを入れる行為の研究」から、画期的なゴミ入れ口のデザイン・構造を発見。ゴミを投げ入れても収納できる「バックボード・シュート式」デザインを開発。人の行為とゴミの種類を配慮した形を採り入れた、ゴミの分別が楽しく軽快にできる「環境ゴミ拾い」サポートツール。

企業賞 賞金30万円 該当作品なし

## 小村 一也

受賞作品『石に棲む魚』



授賞式の模様



淀川・琵琶湖流域に生息している固有種の淡水魚類を、泳いでいる姿そのままに実寸で自然石に描いたネイチャーアート。実際に作品に触れて楽しむアートコミュニケーションを通して、多くの人に地元水系の生態系が持つすばらしさを知ってもらうことを目的としている。

## マエキタミヤコ

サステナ代表

ユニークな作品がたくさん集まったなかでも美しかったのは『Bag in bag』。ひときわ明るく光っていた。このコンテストはもっと世に知られなければいけない。世間に広く知られることで、たくさんエコ作家、エコクリエイターの登竜門、ベストセラーエコグッズの登竜門となることに期待したい。来年を楽しみ。

## 益田 文和

東京造形大学デザイン学科教授

『core』は、使い古したスケートボードから新しい製品をつくるという、地味だけれどきちんと効果がわかる作品で好感を持った。地球環境を取り巻く状況は、気づき、共感などと言っている場合ではないほど切迫している。小さくても構わないから、実効性のあるイノベティブな提案に向けて知恵を絞って欲しい。



## エコアート

応募総数 58 件

eco japan cup 2007

持続可能な社会への啓発。エコロジーという領域の“芸術”を開拓

## グランプリ

賞金100万円

## 鈴木 勲

受賞作品『バイオ耕うん機の旅(白州 琵琶湖 白州)』

白州(山梨県北杜市)~琵琶湖往復900kmを、道中で使用済みてんぷら油(廃食油)を利用したバイオ燃料を自作し、給油しながら耕うん機で旅をしたドキュメント作品。太陽電池、風力発電機をカメラやPCの電源に利用し、作品を創作。



## 準グランプリ 賞金50万円

## 糸曾 賢志

受賞作品『コルポッコロ』

「自然との共存」をテーマにおき、文化と科学を優先するがゆえに自然が失われた街を舞台に、一人の少女の心の葛藤を描いたオリジナル



アニメーション作品。影絵アニメやCGアニメを盛り込むなど、独自の表現を追求した。

## サカガワ リエ

受賞作品『オチバナ』

作品には、散った花びら、木から落ちた実、枯れた草、折れた幹などだけを使用し、草木のいのちを摘むことは一切しない。



オチバナの体験教室

完成後、作品は写真に撮って残し、素材はすべて土に返すなど、「いのちのリサイクル」を実践。

## 特別賞 賞金30万円

## SR.

受賞作品『MELTY-MEL』

環境について問題提起するキャラクターとして、「ちきゅうおんだんか」により溶け出したモンスター「MELTY-MEL(メルティ・メル)」を創作。



アートの要素を採り入れたキャラクターを通して、エコや環境問題を身近に感じさせていく。

## エコアート[審査員コメント] 敬称略

## 日比野 克彦 アーティスト

基本的に人間が表現するものがアートであり、どこかでエコロジーとはつながってくるが、現代社会における「エコ」とは、また特別な意味がそこにはある。それを直接的に表現しても作品としては弱いものになってしまうが、大賞の鈴木さんの作品はアートの姿勢を外さずに、エコロジーを切り口にして現代社会を表現した作品と言える。

## 竹内 宏彰 株式会社シンク 取締役/エグゼクティブ・プロデューサー

応募作品はそれぞれ個性的かつ独創性に富んだものばかりで、楽しみながら審査をさせていただいた。特に『バイオ耕うん機の旅』の、自らの体を張ったエコパフォーマンスの説得力には圧倒された。今回の受賞を機に、全国を旅してもらいたいと思う。

## 中谷 日出 NHK解説委員/BS2デジタルスタジアム ナビゲーター

「アートがエコに対して何ができるのか?」を私自身、再考することができ、審査に参加してよかった。本当に拝見した作品すべてが印象的だった。このような取り組みは、長く続けることが大切。はじめたからには長く続けて欲しい。

## 藤 浩志 美術家

エコという視座や価値観が、まだ生活の中に根付いていない状況が作品を通して見えるようだった。そのなかで、『バイオ耕うん機の旅』は、直接のコミュニケーションを通したデモンストレーションとして愉快で大切。一緒に旅してみたいと思わせる魅力があった。

## 宮島 達男 現代美術家/東北芸術工科大学副学長

エコという真面目な作品を想起しがちだが、自由な発想も多く、良かった。なかでも、グランプリ作品はインパクトがあった。今後は、環境問題に対して、カッコ良く、おしゃれで簡単という新しい表現を与え、若い人に届く言葉で伝えていくことが必要だと思う。



eco japan cup 2007

# エコミュージック

応募総数 51 件

持続可能な社会への啓発。エコロジーという領域の“音楽”を開拓

## グランプリ

賞金100万円

### サリーケイ 受賞作品『たびんちゅう』

人から見た地球、地球から見た人を歌詞の中に表現するとともに、エレクトロニカなリズム



音と三拍子のクラシカルなワルツを融合し、過去、現在、未来、という太陽系を表現。子供から大人まで親しみやすいメロディーと歌詞にすることで、環境への前向きな取り組みを喚起させることに期待。

## 準グランプリ 賞金50万円

### ニライカナイ 受賞作品『ena』

三線などを採り入れたアコースティックな音づくりを基本に、月、海、山、空、花、草、川、土、人、唄、そのすべてが「え～な～」という関西弁をメロディーに乗せたポジティブイメージでつくられた作品。飽きのこないメロディーのため、10年後でも新鮮さを失わず、歌い継がれることに期待。



### Ego Colo 受賞作品『ガーベツマン』

ゴミ回収の仕事を通して環境に貢献している「ガーベツマン」の休日を軸にして、作詞作曲。「ガーベツマン」の重要性和格好良さを伝えることで、日々、活躍している全国の「ガーベツマン」への敬意が芽生え、ゴミ削減に繋げる。



## team HAKUHODO RECORDS賞 賞金30万円

### 菊本 りり子 受賞作品『MIDORI ~ 繋がる輪 ~』

緑のもたらす木陰の涼しさや心地よさ、土のぬくもり、自然に宿る生命。子供たちは「緑のカーテン」の取り組みを通じて、自然の営みに感動し驚き、わずかな土や1滴の水にも愛おしさを覚え、「緑のカーテン」をサポートして下さる企業や地域の方々から、人と人のつながりの大切さも感じ取りました。

このような緑と子供たちの成長を見ながら、自然も地球も人もすべてつながっているということを歌にしたものが『MIDORI ~ 繋

がる輪 ~』です。この歌は、環境教育のためにつくったわけではありません。前半では、さまざまな命に触れた子供たちの感動をさらさらと、後半では、緑を通じてたくさんの人たちがつながっていく喜びを生き生きと表現したいと思いました。

子供たちは「この歌、なんだかいいね!」と気持ちを込めて歌ってくれます。それが私にとって何よりの喜びですね。



菊本 りり子氏

## エコミュージック[審査員コメント] 敬称略

### 阿部 義晴 ミュージシャン/プロデューサー

応募作品のレベルの高さに驚くとともに、個人的には大変楽しくかつ興味深く聴くことができた。エコは漠然としがちなテーマだが、とても大切なこと。それをこうした形で具体的に提示したことに意味があり、さらに続けていくことに真の意味があると思う。

### 川崎 龍彦 NHKエンタープライズ エグゼクティブプロデューサー

「エコミュージック」とは何か? メッセージ、音楽への取り組み方、人としての生き方... 候補作品には、その課題に向き合う清濁しさがあつた。準グランプリ作品の『ena』は、未来からの預か「花の・大切な地球」への熱い想いが伝わってきた。

### 小久保 隆 環境音楽家

今回の審査を通し、「エコミュージック」という新しい視点から音楽に向き合えたことに感謝している。グランプリ『たびんちゅう』、そして『MIDORI ~ 繋がる輪 ~』は、特に印象に残った。「音楽の力」をもっと信じ、環境への取り組みを広げていくことに期待したい。

団体審査員 ミュージックセキュリティーズ株式会社 MTV JAPAN Inc.

### 塚本 廣昭 team HAKUHODO RECORDS代表

『たびんちゅう』のスケール感とフレッシュな感覚。『MIDORI ~ 繋がる輪 ~』の爽やかさ。いずれも、子供から大人まで、歌いやすく、覚えやすいメロディーで「こころのエコ」になると感じた。音楽は「こころのエコ」に効果がある。今後も、このコンテストを応援していきたい。

### 中島 信也 株式会社東北新社 専務取締役/CMディレクター

音楽に「エコ」という視点を持ち込もうとする取り組みそのものが大変興味深かった。集まった作品はレベルが高く、楽しいと同時に審査することの難しさもあった。その中で、グランプリの『たびんちゅう』は秀逸。エコという枠組みを外しても楽しめるすばらしい曲だと思う。

### 溝口 肇 チェリスト/作曲家

さまざまな可能性、創造性、方向性を持った作品が多く集まったことは、大変嬉しかった。エコを音楽として表現するには、やはり言葉が重要になってくる。その点で、『ガーベツマン』の歌詞がストレートで力強く、広がりを感じられ、好印象だった。



eco japan cup 2007

## エコチャレンジ!

応募総数 37 件

持続可能な社会に向けての市民のくらしの工夫、エコ版「伊東家の食卓」的アイデアコンテスト

エコスタイル大賞 賞金10万円 該当作品なし

エコアイデア大賞 賞金10万円

### 渡辺 里沙 『究極のエコ弁当、ゴミは減るけどたんぼは増える ~ 最中弁当 ~』

和菓子に用いられる最中を弁当容器として活用。食べられる素材を弁当容器にすることで、ゴミがゼロに。最中弁当は、エコロジー面の利点ばかりでなく、見た目、味、食感などすべてを楽しめる。また、おかずを小さな最中に小分けして弁当容器に入れることで、弁当容器が汚れず、洗剤で洗う必要がなくなる。さらに、最中を利用することでもち米の需要を高め、もち米を作るたんぼの増加を促進する。食べる物ができるところからエコにする、新しいお弁当スタイルを提案。

エコアイデア賞 賞金5万円

### 住田 昌治 『一歩進んだクールビズ』

クールビズにおいて、ワイシャツを着用した場合、洗濯後にアイロンがけが必要となる上、夏場の暑い中でのアイロンかけでは、エアコンを使用することになるため、2倍の電力を消費してしまう。一方で、ポロシャツはアイロンがけの必要がないため、夏場の電力消費を減少させることにつながる。本人も、家族も、涼しく過ごせ、節電にもつながるポロシャツの着用をクールビズで推進することで、地球温暖化防止につなげていくアイデアを提案。

### 中野 善浩 『彩り食用フェンス』

小さなスペースでも、ハーブなどの食用可能な植物を栽培できることに着目し、自宅敷地内のフェンスを活用した食用フェンスを実施。その結果、食用フェンスは街路のアクセントとなり、見知らぬ人とのコミュニケーションを生み出すきっかけとなったばかりでなく、収穫した実は、身近な食育の教材として活用している。彩りある植物を増やすことで、街の楽しさを演出すると同時に、多くの人々にエコライフを伝えていくアイデアを提案。

エコチャレンジ! 電通賞 賞金3万円

### 山脇 一休

#### 『無公害ソーラーバイクでタダ乗り日本縦断』

「太陽光発電による無公害エネルギーで、北海道から九州までタダで走ってみたい」という夢から、家族とその仲間と構成されたチームを結成し、ソーラーバイクを設計・開発。バイクに積んだソーラーパネルによる発電と、同行したサポートカーに搭載したソーラーパネルで充電したバッテリーだけで、北海道・北見市から福岡県・柳川市まで、17日間・約2,800kmを走破。動力源となるすべてのエネルギーに太陽光を利用するという世界初の試みに成功した。

伊東家ランドecoな裏ワザ賞 賞金3万円

### 永井 絵美子

#### 『飲み終わった牛乳パックが便利なキッチングッズになるecoな裏ワザ』

飲み終わった牛乳パックを活用して、豆腐の水切りを行う「ecoな裏ワザ」を提案。使用後は、水洗いするだけで再びリサイクル素材として活用できるアイデア。

協力: 第2日本テレビ伊東家ランド <http://www.dai2ntv.jp/r/itoke.html>

#### エコチャレンジ! [審査員コメント] 敬称略

##### 小池 百合子

元環境大臣/衆議院議員  
環境ビジネスウィメン顧問

ecoな裏ワザ 審査員

##### 第2日本テレビ伊東家ランド

ライフスタイル部門 団体審査員  
株式会社電通

##### 枝廣 淳子 翻訳家

アイデアがさらに広がるものがあり、とても楽しかった。楽しんでやっているのが伝わってきた。いいアイデアが選べたと思う。

##### 倉林 里実 saita編集長

「エコする」ことで、日常生活がいつもより楽しくなるアイデアがいっぱいだった。自然と一緒に暮らす感覚を、もっと多くの人につながってほしいいな、と痛感した。

##### 高樹 沙耶 ドリームクリエイター

エコが急激に動き始めていて、これからおもしろいことが起こってくる予感がする。環境元年かもじゃない。

##### 株式会社電通

環境の取り組みをただ自分たちが取り組むだけでなく、他の人たちへ広がっていくことを想像して、楽しく伝えようという心意気があり、嬉しかった。クリエイティブになってきて、盛り上がっている。大変勉強になった。皆さん、ありがとうございました。

##### 皆川 孝徳 リンカーン発行人

考えるだけでなく、実践している人が多いのが素晴らしい。自分もできるところからやらなきゃ。企業などに求めるアイデアには、もう少しビジネススキームが必要かもしれない。

##### 伊東家ランド

『飲み終わった牛乳パックが便利なキッチングッズになるecoな裏ワザ』は、牛乳パックの内側の紙質に注目し、その特性を上手く利用したまさに「ecoな裏ワザ」。とてもいいアイデアだった。





eco japan cup 2007

# 市民が創る環境のまち 元気大賞 2007

応募総数 46 件

持続可能な社会へ向けて、環境活動で地域を活性化

## 元気大賞 賞金10万円

### 場所文化フォーラム(東京/十勝) 『場所文化レストラン』とかちの...オープン・「場所文化イチバ」の実現に向けてのファーストステップ - 』

#### 受賞者コメント 場所文化フォーラム代表幹事 吉澤 保幸氏

私たちが考える地域活性化は、各地域が歴史的に紡ぎ出してきた「場所文化」の再創造により新たな人々の交流を促し、場所への資金流入と域内循環をもたらす新たな仕組みを構築することで、自然との共生促進や経済活性化を実現し、場所の自立を目指すことです。「とかちの...」は、十勝などの

豊かな食文化を通じた「場所文化」創造の表現の場であり、都市と地域との新たなお金(志金)と人(志民)の継続的循環・交流を実現しています。そして、次なる「場所文化イチバ」(食文化の屋台村)を早期に具体化し、ローカルな自然の恵みを起点にした場所文化の創出を目指します。



写真:吉澤氏と「とかちの...」千代田区丸の内3-1-1 国際ビル地下1階

## 奨励賞 賞金5万円

### 茂木町役場(栃木) 『人と自然にやさしい農業をめざして』

人と自然にやさしい農業を目指し、不用とされていた廃棄物や未利用資源(生ゴミ、家畜排せつ物、落ち葉、もみ殻、おがこ)を町ぐるみで収集し、良質なたい肥を製造販売。その取り組みを中心に、地域資源を循環しながら「環境保全型農業の推進」「ゴミのリサイクル」「森林保全の推進」「農産物の地産地消の推進」を総合的に推進している。

### 真宗大谷派・東本願寺(京都) 『東本願寺御修復環境プロジェクト/東本願寺と環境を考える市民プロジェクト』

世界最大の木造建造物である「御影堂」の御修復工事において、瓦の再資源化、仮設素屋根への太陽光パネルや雨水タンクの導入など、環境配慮型の工事を推進。また、地域住民や環境NPO団体と協働して「東本願寺と環境を考える市民プロジェクト」を組織し、境内庭園やお堀を活用したイベントを開催するなど、地域社会における環境問題への取り組みを実施。

## 特別賞 賞金3万円

### 上板町役場産業課(徳島) 『ひろめようにこここプロジェクト G』 地域交流会「にじのかい」(徳島) 『ごーやくんがんばれ!』

上板町役場では、地球温暖化防止対策として、町内の建物の窓際の壁面をゴーヤで囲む「緑のカーテン」づくりを行うプロジェクト『ひろめようにこここプロジェクト G』を推進。また、同地区の地域交流会「にじのかい」も、プロジェクト『ごーやくんがんばれ!』を立ち上げ、緑のカーテン事業を支援するとともに、町全体や隣接市町への普及啓発活動を行っている。

## 元気大賞 電通賞 賞金3万円

### アーバンエコロジー東京(東京) 『自転車活用の推進による地球温暖化の抑止』

多くの自転車利用者のアイデアをまとめ、都心を楽しく安全に走るための情報を共有する「東京自転車グリーンマップ」を制作。また、「東京アースデイ自転車ライド」の実施などを通して、地球温暖化を抑止するために、自転車の活用を推進することで、 unnecessary 自動車の使用を減らすためのさまざまな活動を推進中。

連携団体(実施事務局):NPO法人 持続可能な社会をつくる元気ネット <http://www.genki-net.jp/index.html>

## 市民が創る環境のまち 元気大賞2007[審査員コメント] 敬称略

### 山本 良一

東京大学 教授  
eco japan cup 2007 実行委員長

### 小澤 紀美子

東京学芸大学 教授

### 木内 孝

GRI日本フォーラム会長/eco japan cup 2007 実行副委員長

奴隷(どがん)の精神で、地域の元気な取り組みを広く全国に広めることはすばらしい。今回は、審査員全員でその役目を果たした。元気大賞で表彰し、みんなで盛り上げていきたい。

### 松田 美夜子

内閣府原子力委員会委員/元富士常葉大学教授

応募の数も中身も充実してきた。来年も頑張らしましょう。

### 高見 幸子

国際NGOナチュラール・ステップ・インターナショナル日本支部代表

全国で元気に活動をされている方たちの活動を知ることができ、とてもうれしい。年々、ゴミ解決へのフォーカスからエネルギー問題、社会的な問題にまで視点が広がり、また持続可能な発展に必要なシステムづくりにも取り組む活動が見られ、すばらしいと思う。今後の市民活動の発展が楽しみ。

### 崎田 裕子

環境ビジネススイメン代表/eco japan cup 2007 実行副委員長  
NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネット理事長

大賞を受賞された団体の、農業や文化を通して地域と都会をつなげるという相互交流の視点は、全国各地域のコミュニティービジネス興しにつながる新しい段階の循環型社会づくりの促進にもなり、今後の広がりに期待できる。

### 株式会社電通

応募の内容には、生ゴミ堆肥化や緑のカーテンなど時代が映し出されている。こうした活動はまだ氷山の一角しか情報発信されていないので、eco japan cupを通じて全国に広げていきたい。また、双方向に情報が発信しあえるよう、来年に向かって準備していきたい。



eco japan cup 2007

# 環境ビジネスウィメンプレゼンツ

## TALKEVENT 【トークイベント】



**木村 麻紀氏** 環境・CSRビジネス情報誌『オルタナ』副編集長



**藤崎 有美** 三井住友銀行 法人マーケティング部



藤崎(写真左)と木村氏

### 「環境ビジネスの社会的評価～金融とメディアの視点～」

木村:藤崎さんは、環境ビジネスのサポートや環境配慮型企業へのご融資など、金融機関という立場からさまざまな取り組みをされていますね。

藤崎:金融機関は、社会に対しての影響力が大きいといえます。

三井住友銀行は、本業を通じて持続可能な社会構築に向けた社会貢献に注力しています。その中でも環境への取り組みは、大規模なプロジェクトから中小企業の方々へのご融資まで多種多様です。私どもは、環境配慮の意識の高いお客さまのニーズに合わせたサービスをご提供することで、環境の維持や問題の改善に貢献したいと考えています。

木村:お金の流れを変えた新たな形での活用や、環境ビジネス育成も大きな使命になっているのではないかと思います。そういった観点で、eco japan cup 2007をどのように捉えていますか。

藤崎:2006年を大幅に上回るご応募数や、新技術、ユニークな発想に驚くばかりでした。また、拡大する環

境ビジネス市場では、新たな分野が創造され、より細分化されていくため、私たちが金融機関として果たす役割を再確認しました。しかし、融資する立場としては、確固たる視点で新分野や先進技術を判断し、本質を見極めなくてはならないということも、同時に強く感じました。

木村:役割分担という点でいえば、私は『オルタナ』を編集しており、メディアとして情報を提供する立場にいます。これは、ヒトと社会と地球を大事にすることをコンセプトに、国内外の環境ビジネスやライフスタイルなどを紹介するビジネス情報誌です。

環境ビジネスという表現がよいのかわかりませんが、環境や社会貢献に取り組むビジネスを積極的に盛り上げ、一方でライフスタイルにおいても環境意識を社会に浸透させる。金融とメディアが両輪となって、地球規模でのよりよい社会構築を目指していきたいですね。

藤崎:お互いのノウハウや情報を活かすことが大切ですね。それが社会貢献につながるわけですから。

木村:2008年は、より環境に注目が集まる1年になります。藤崎さんの環境活動やビジネスに対する抱負をお聞かせください。

藤崎:金融機関における環境ビジネス支援というところでは、既存の環境配慮型ローン拡大に努め、新たな環境規制に対応するサポートなども考えています。

木村:2008年の金融機関の取り組みも大変注目しています。弊誌も、金融機関をはじめ多くの企業や地域での環境に対する取り組みを、ライフスタイルと交えて紹介し、より多くの方に影響力を与える誌面づくりをできればと思います。



2007年12月13日開催

TALK  
EVENT

02

善養寺 幸子氏 オーガニックテーブル株式会社  
代表取締役

×

小林 光氏 環境省大臣官房長



### 「これからのスタンダード～エコハウス!」～エコハウスセミナー～

善養寺:私が考えるエコハウスは、自然調和型で、人が健康で快適な生活ができる家です。快適さを追求することで人は住まい方を工夫し、その知恵が環境負荷削減につながるので、とても面白みがあります。小林さんはエコハウスにお住まいですが、エコハウス建築のきっかけや実生活について教えていただけますか。

小林:私は環境省に勤務し、環境負荷削減対策に取り組んでおります。そもそもエコハウス建築のきっかけは温暖化対策のためでした。仕事上だけでなく、生活の中でも環境負荷削減に取り組むことが必要だと考えたからです。

我が家では、できるかぎりの環境に配慮した設備や対策を施しています。熱環境対策として、断熱材や窓材は熱効率のよい製品を使用、太陽光や風力による自家発電、輻射熱による床暖房、贅沢かもしれませんが薪ストーブもあります。給水は、一度使用した水の再利用や雨水の利用、透水性舗装を、家の四方は塀をつくらず緑のフェンスにし、南側の太陽光を遮断するため2階のバルコニーにプランタを置き壁面緑化もしていま

す。このような対策をした結果、エコハウスに建て替える前に比べて光熱費が約50%削減されました。住み心地も以前に比べてずっと快適です。

善養寺:エネルギー使用量や発電など、数値化されるとゲーム感覚で楽しみながら暮らし方を工夫するようになりますよね。でも、実際エコハウスの建築に踏み切るためには費用の問題もありますね。

小林:確かに費用は頭の痛いところです。しかし、初期投資は高いと感じても、長い目で見れば費用負担は少なくなるのではないのでしょうか。環境対策のための設備は手を加えながら次世代まで引き継げるようなものですし、光熱費や水道料金は建て替え前に比べて削減します。また、環境対策の公的支援や補助金制度を利用すれば初期投資を回収できると思います。

善養寺:エコハウスの費用対効果、使用対効果といったらいいのかな。すべてをきちんと計算すれば考え方も変わってきますね。

小林:エコハウスで元が取れるかどうかは、メンテナンスも考えれば難しいかもしれません。しかし、経済的な損得勘定ではなく、自家発電などによる災害時のライフライン確保や健康面の改善といったメリットもあります。エコハウスに対する政策や金融優遇を強化することが急務ですね。

善養寺:今後の住宅は、エコハウスがスタンダードになるだろうと私は思っています。それは、地球温暖化の問題解決のためだけではなく、人間は、快適な暮らしを追求しながら生きているからです。エコハウスなら省エネで快適を手に入れることができます。

自分にとってのインセンティブを見つけて、ぜひエコハウスづくりにチャレンジしていただきたいですね。



2007年12月15日開催

# eco japan cupについて

eco japan cupのコンセプト

## 「エコビジネスの芽を見つけ、育てる」 一大エコプロジェクト

地球温暖化を抑止し、人類が住み続けられる地球を守り、持続可能な社会を形成するには、経済そのものが今までと違う価値観を持つことが重要です。豊かな経済が環境を良くする社会、環境を良くする企業が経済を得る社会。そんな「環境と経済の好循環社会・日本」の実現を目指し、官民協働事業として、「エコビジネスの芽を見つけ、育てる」コンテストが「eco japan cup」です。

2回目の開催となった「eco japan cup 2007」では、経済を支える「企業(ビジネス)」「市民(ライフスタイル)」、それをつなぐ「文化(カルチャー)」の3つのカテゴリーを設け、経済活動に関わるすべてのステークホルダーを対象に、ecoをテーマとしたコンテストを実施。さらに、東西8つの大学と連携し、大学との共同研究にふさわしいビジネスアイデアがあれば研究助成金を拠出する仕組みもつくるなど、産学官協働プロジェクトとしても、規模・内容ともに他には類のない一大エコプロジェクトへと発展しています。

## グランプリを選出することが 目的ではないコンテスト

単なるコンテストではとどまらない。それが、「eco japan cup」の最大の特徴です。

たとえば、ビジネス部門の「環境ビジネス・ベンチャーオープン」では、一次審査を通過したビジネスプランには、各方面の専門家によって、より充実したプランに発展するよう、経営面、技術面、マーケティングなどについてのコンサルティングアドバイスが、環境省より提供されています。受賞者にはビジネスマッチングの機会も提供されます。また、カルチャー部門、ライフスタイル部門においても、粗削りでも可能性を秘めた作品・アイデアについては、今後のビジネスにつながるよう大手広告代理店や専門のプロデューサーがバックアップをする体制が整えられています。

つまり、「eco japan cup」は、賞を争うだけの単なるコンテストで終わるものではありません。エントリー者のみならず、ここに集う企業や団体を含めた、すべての参加者の“出会いの場”となり、相互に連携し、影響し合うことで、エコビジネスの芽を大きく育てていく。そして、そこから新たな経済価値を創り出し、日本発、世界の経済をエコ化する!それが、「eco japan cup」の目的なのです。

「eco japan cup 2007」は、環境省、環境ビジネスウィメン、三井住友銀行の三者主催で開催いたしました。

## 主催者からのご挨拶

「eco japan cup 2007」の開催にあたって



平成19年12月  
環境大臣  
鴨下 一郎

「eco japan cup 2007」が盛大に開催されますことに、心よりお慶び申し上げます。

今日喫緊の課題であり、また2008年7月に行われる北海道洞爺湖サミットにおいて主要なテーマとなる地球温暖化問題の克服には、環境と経済が共に向上することが鍵となります。そのためには、環境ビジネスを拡大し、環境への負荷の少ない製品・技術・サービスの開発・普及を進め、環境と経済の好循環を生み出していくことが重要です。

「eco japan cup 2007」は、新たな発想を持ってエコビジネスに挑戦する事業者や個人・NPOなどをビジネス部門、カルチャー部門、ライフスタイル部門の3分野において表彰するとともに、環境への負荷の少ない最新の製品・技術・サービスや文化・地域活動の、さらなる普及を図ることとしております。

このような表彰、発信を通して大企業からベンチャービジネスまで規模や歴史もさまざまな企業・団体などが、それぞれの特色を活かし、既に事業化されたものから、出てきた芽をこれから育てようとするものまで多岐にわたる事業を掘り出し、世界に向けて発信していこうとする、環境ビジネス拡大の新しい試みであり、大いに期待しております。今回参加された全ての企業・団体などの皆さまに、マーケットを環境ビジネスで変えていくため、引き続き取り組みを進めていただきたいと思います。

環境省としても、環境ビジネスの芽を見つけ、育てていくために、できる限りの応援をしていきたいと考えています。

最後に関係各位の今後の益々のご活躍を祈念いたします。



元環境大臣/衆議院議員/  
環境ビジネスウイメン顧問  
小池 百合子

今、地球温暖化問題を中心に、環境問題への関心が高まっています。私は日本が持つ「環境のわざと心」を活かすことが、環境問題の解決に大きな役割を果たし、さらに経済を支え、日本の品格を向上させることにつながると考えています。

まず「環境のわざ」としては、太陽光発電、次世代自動車、水質浄化設備、大気汚染防止設備など、日本には国際競争力の高い技術が数多くあります。ただし、世界の国々が環境に大きく舵を切る中、競争に生き残るためのものづくりの水準をさらに高めていかなければなりません。また、海外まで裾野の広いお客さまに提供できるような価格競争力をつけることも大切です。環境ビジネスのお客さまは最終的には「地球様」ですから、非常に大きいマーケットが広がっていますので、頑張りがいもあります。

次に「環境の心」ですが、「もったいない」という言葉に代表されるように、日本人は潜在的に高い環境マインドを持っています。技術革新と同様、国民・企業・自治体などさまざまな主体が意識革新をすることによって「環境の心」が顕在化し、大きなうねりを生み出すことができます。

さらに、こうした環境への大きなうねりを、個人金融資産1,400兆円以上という日本の金融力につなげてフル活用すべきです。金融

の果たす役割は極めて大きく、ものづくりやサービスを支える基礎である金融が環境の方向にシフトすることで、社会変革を加速することができます。「環境のわざと心」と日本の金融力が相乗効果を生み出すことに期待しています。

さて、「eco japan cup」も2007年で2年目を迎え、ビジネス部門の「環境ビジネス・ベンチャーオープン」には、2006年の約5倍もの応募がありました。量と質の両面で環境ビジネスの厚みが増しているという実感があり、非常に手ごたえを感じています。

今後、応募者の皆さまには、市場で認知され、利益を生み、雇用を生み、経済を活性化するとともにさらに新しい環境価値を生み出すという「環境と経済の好循環」の実例となっていきたいと思えます。ベンチャー企業の方々にはいずれ上場もしていただき、海外からも人材が集まるような魅力的な企業に成長し、「六本木ビルズはITから環境に変わった」と言われるくらいになってほしいものです。「大風呂敷を広げる」ようですが、環境ビジネスの世界には風呂敷を広げるだけの十分な理由と価値があります。新しい環境の世紀の担い手の皆さまは、ぜひこの「eco japan cup」を環境ビジネスの登竜門として活用し、世界に羽ばたいていただきたいと願っています。

### eco japan cup 2007 協力団体一覧

主催	有限責任中間法人 環境ビジネスウイメン、株式会社三井住友銀行、環境省
後援	経済産業省/国土交通省/内閣府/農林水産省/文化庁/朝日新聞社/産経新聞社/東京新聞/日本経済新聞社/日経BP社/毎日新聞社/読売新聞東京本社/NPO法人環境経営学会/東京商工会議所/日本商工会議所(社)日本経済団体連合会(社)経済同友会(社)日本青年会議所/日本政策投資銀行/日本ベンチャーキャピタル協会/日本貿易振興機構(ジェトロ)北海道/青森県/岩手県/宮城県/秋田県/山形県/福島県/茨城県/栃木県/群馬県/埼玉県/千葉県/東京都/神奈川県/新潟県/富山県/石川県/福井県/山梨県/長野県/岐阜県/静岡県/愛知県/三重県/滋賀県/京都府/大阪府/兵庫県/奈良県/和歌山県/鳥取県/島根県/岡山県/広島県/山口県/徳島県/香川県/愛媛県/高知県/福岡県/佐賀県/長崎県/熊本県/大分県/宮崎県/鹿児島県/沖縄県
協力	日本テレビ/深瀬記念視覚芸術保存基金/ノニー・ミュージックコミュニケーションズ/ジャパンデザインネット/MTV Japan Inc.
連携団体	NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネット
協賛	株式会社アーバンコーポレイション/株式会社インターネットイニシアティブ/佐川急便株式会社/新日本石油株式会社/住友林業株式会社
ライフスタイル部門特別協賛	株式会社 電通
特別協力	エコプロダクツ2007

#### eco japan cup 2007 実行委員会

実行委員長	山本 良一	(東京大学 教授)
実行副委員長	木内 孝	(GRI日本フォーラム会長)
実行副委員長	崎田 裕子	(環境ビジネスウイメン代表)
実行委員	奥 真美	(首都大学東京都市教養学部 教授)
実行委員	笠井 俊彦	(環境省総合環境政策局環境経済課 課長)
実行委員	佐藤 耕司	(三井住友銀行経営企画部CSR室 室長)
実行委員	服部 徹	(環境ダイナマイト! 企画者)

#### eco japan cup 2007に関するお問い合わせ

eco japan cup 2007総合運営事務局  
有限責任中間法人 環境ビジネスウイメン  
〒121-0816 東京都足立区梅島3-3-19  
ECO DD FACTORY 1F  
Tel. 03-5888-9139  
E-mail: info@eco-japan-cup.com  
eco japan cup ロゴマークデザイン 永井 一史

## Topics 1

### 福田首相、2020年までに30%のエネルギー効率改善目標を提案

ダボス会議において、福田首相は温室効果ガス排出削減に国別総量目標を掲げる「クールアース推進構想」を発表した。

2008年1月26日にダボス(スイス)で開かれた世界経済フォーラム(WEF)の年次総会(ダボス会議)において特別講演した福田康夫首相は、気候変動問題に取り組むための「クールアース推進構想」を発表した。福田首相はこの構想において、2020年までに世界全体で30%のエネルギー効率改善を目標とすることを提案した。

「クールアース推進構想」は、3つのテーマで構成されており、1つ目として「ポスト京都フレームワーク」に関する提案が発表された。この中で福田首相は、日本における今後の温室効果ガスの排出削減に国別総量目標を掲げて

取り組むことを明言、総量削減の目標設定は、エネルギー効率などを尺度にセクターごとの削減可能性を積み上げる方式を提案した。

2つ目のテーマは「国際環境協力」に関するもので、その内容は、国内の優れた環境技術を他国に移転することでエネルギー効率の改善を図ることや、100億ドル(約1兆760億円)規模の新たな資金メカニズム(クールアース・パートナーシップ)を構築して、途上国の排出削減への取り組みに積極的に協力するというものであった。

3つ目のテーマは「イノベーション」に関するもので、技術革新によって低炭

素社会への転換を図るという内容であった。石炭火力発電所からのCO<sub>2</sub>排出をゼロにする技術や、世界中の屋根に取り付け可能な低コストで高効率の太陽光発電技術、さらにグリーンITの開発を加速する技術など、先進的な環境技術の研究開発に関して、今後5年間で300億ドル(約3兆2,300億円)程度の資金を投入することを明言した。

福田首相は、自らが議長となる北海道洞爺湖サミットを、この「クールアース推進構想」の討議の場にするという決意を表明し、特別講演を締めくくった。

## Topics 2

### 日本の年平均気温は100年当たり1.10度の割合で上昇

2007年の年平均気温は、世界では観測史上6番目、国内では4番目に高温の年に。

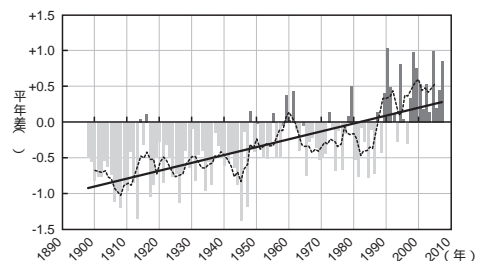
気象庁は、2008年2月1日に2007年における世界と日本の年平均気温の調査データを発表した。

気象庁によると、2007年の世界の年平均気温(陸域における地表付近の気温と海面水温の平均)の平年差はプラス0.28度で、統計を開始した1891年以降では1998年、2005年、2006年、2003年、2002年に次いで6番目に高い値となる見込みだ。一方、日本の年平均気温の平年との差はプラス0.85度で、統計を開始した1898年以降では

4番目に高い値となった。なお、長期的に見ると世界の年平均気温は100年当たり0.67度、日本の年平均気温は100年当たり1.10度の割合で上昇しており、特に日本では1990年以降、高温となる年が頻出している(図1)。

気象庁ではその要因について「二酸化炭素などの増加による地球温暖化の影響に、数年～数十年程度の時間規模で繰り返される自然変動が重なったため」という見解を示している。

図1:日本の年平均気温の平年差の経年変化(1898-2007年)



棒グラフは各年の値、破線で示される曲線は各年の値の5年移動平均、太線の直線は長期変化傾向を示す。ただし、2007年は1月～11月の期間から算出した値を用いている。

出典:気象庁発表資料  
「2007年の世界と日本の年平均気温について」

# NEWS Head-Lines 2007.12-2008.02

## 経済

- 松下電器産業は、使用済みブラウン管テレビの筐体に使用される難燃剤入りプラスチックを、薄型テレビに再利用するテレビ用プラスチックの自己循環型リサイクルの仕組みを構築、運用を開始した。(12/11)  
<http://panasonic.co.jp/>
- 東京ガスは、東京都環境整備公社と共同で、東京都区内の小中学校の給食ごみなどの生ごみから、バイオエタノールとバイオガスを同時に回収する実証試験を実施する。これは、環境省の「次世代廃棄物処理技術基盤整備事業」の採択を受けたもので、従来のメタン発酵によるバイオガス回収方法と比較して、より高効率で高付加価値の再生可能エネルギーを回収するシステムの構築を図るため、江東区清掃事務所に実証試験施設を建設する。(12/12)  
<http://www.tokyo-gas.co.jp/>
- 丸紅はインドネシア共和国の国立ランポン大学と共同で、同国における地球温暖化ガス排出削減のためのCDM事業促進に取り組むことで合意した。(12/14)  
<http://www.marubeni.co.jp/>
- IBMと「持続可能な開発のための世界経済人会議」(WBCSD)のチームは、ノキア、ヒソニーボウズ、ソニーと協力して、エコ・パテントコモンズ(Eco-Patent Commons)を設立した。これは、革新的な環境技術に関する数十件の特許を開放するという、環境のための取り組みとしては初の試みとなる。(1/15)  
<http://www.ibm.com/jp/>
- 清水エスパルスは、日本プロスポーツ団体として初めて、CO<sub>2</sub>排出権購入の実施を決定した。(2/1)  
<http://www.s-pulse.co.jp/>

## 政策

- 環境省は、2007年12月13日に政府与党の2008年度税制改正大綱の内容が固まったことを受け、環境税、バイオ燃料関連税制の創設、住宅省エネ改修促進税制の創設、自動車の低公害化、低燃費化の推進、エネルギー需給構造改革投資促進税制、道路関係諸税など環境省関係の税制改正主要事項を発表した。(12/17)  
<http://www.env.go.jp/>
- 経済産業省は、新エネルギー利用等の促進に関する特別措置法施行令の一部を改正する政令を発表した。この政令は、最近の新エネルギー利用などをめぐる経済的社会的環境の変化を踏まえ、利用促進の対象と

なる新エネルギー利用などから再生資源を原材料とする燃料を製造すること等を削除し、アンモニア水などの液体を利用して地熱を発電に利用すること等を追加するもの。(1/29)

<http://www.meti.go.jp/>

- 環境省と独立行政法人国立環境研究所は、生態毒性予測システム(通称:KATE)のWeb試用版を公開した。同システムは、化学物質の構造式などを入力することで、魚類急性毒性試験の半数致死濃度およびミジンコ遊泳阻害試験の半数影響濃度を予測することができる。(1/31)  
<http://www.env.go.jp/>

- 環境省は、2008年度京都議定書目標達成計画関係予算案を発表した。関係予算案額は、「京都議定書6%削減約束に直接の効果があるもの」が5,194億円、「温室効果ガスの削減に中長期的に効果があるもの」が3,095億円、「その他結果として温室効果ガスの削減に資するもの」が3,430億円、「基盤的施策など」が447億円。(2/6)

<http://www.env.go.jp/>

## 技術

- 新日鉄マテリアルズは、新日本製鐵先端技術研究所との共同開発により、貴金属使用量の従来比約7割削減した新しいタイプの排ガス浄化用触媒材料を開発した。アルミニウム系酸化物の代わりに鉄系酸化物を使用し、さらにアルカリ土類金属を添加して「ナノ複合結晶組織」とすることで高い触媒活性を実現、貴金属使用量の削減が可能となった。(12/18)

<http://www0.nsc.co.jp/>

- 日立製作所は、電気・電子機器を使用する際に、機器内の温度が200℃まで上昇しても、1,000時間以上、部品接続部に劣化のない接続状態を維持できる鉛フリーはんだ接続技術を開発した。これにより、電気・電子機器の電力変換に用いるパワーエレクトロニクス製品分野において鉛フリー化の実現が可能になる。(1/30)

<http://www.hitachi.co.jp/>

## 社会

- 経済産業省は、第18回「省エネ大賞(省エネルギー機器・システム表彰)」を発表した。経済産業大臣賞は、松下電器産業と松下ホームアプライアンス社の温水洗浄便座「ビューティ・トワレ」が受賞した。(1/17)

<http://www.meti.go.jp/>

## 編集後記

●先日聞いたチャールズ・セクレット氏の話の中で、「取引可能な個人の排出量割当制度」のアイデアがありました。数年前にも英国で同じような話を聞きました。日本では「環境ファシズム」として眉をひそめられそうですが、彼らの発想では賢い人がたくさん支払うという合理的な選択なのかもしれません。発想転換は新しい世界をつくります。(英)

●今回は、三井住友銀行が環境省と主催する、環境ビジネスの芽を見つけ育てるコンテスト「eco japan cup 2007」の大特集としました。ぜひ一読下さい。(朋)

本誌「SAFE」はホームページ上でもご覧いただけます

<http://www.smfg.co.jp/responsibility/environment/safe.html>

本誌の送付先やご担当者の変更などがございましたら  
Faxにてご連絡をお願いいたします。

企画部:早川 Fax:03-5512-4428

**SAFE** vol.70

発行日 ————— 2008年3月1日(隔月刊)

発行 ————— 株式会社三井住友フィナンシャルグループ 企画部  
〒100-0006 東京都千代田区有楽町1-1-2  
Tel(03)5512-4441 Fax(03)5512-4428

監修 ————— 株式会社日本総合研究所 創発戦略センター

企画協力 ————— 株式会社三井住友銀行 三井住友カード株式会社  
三井住友ファイナンス&リース株式会社

編集 ————— 凸版印刷株式会社 情報コミュニケーション事業本部  
コミュニケーション企画部

印刷 ————— 凸版印刷株式会社

※本誌掲載の記事の無断転載を禁じます。 ※本誌は再生紙を使用しています。

本誌をお読みになってのご意見、ご感想をお寄せ下さい。  
また、環境問題に関するご意見もお待ちしています。



2008年3月

